

「～っぱなし」の意味・用法に関する研究

中 村 愛

1. はじめに

本稿は次のような「動詞の連用形+っぱなし(っ放し)」を研究対象とする。

(1)弟は2時間ずっと食べっぱなしだ。

(2)弟は食べっぱなしで出かけてしまった。

(1)は、「弟が2時間ずっと食べ続けている状態」を表し、(2)は「弟が食事した後、食器等の後片づけをせずに出かけた状態」を表している。つまり、(1)は「今、弟が食べている状態」を表しているが、(2)は「今、弟が食べていない状態」を表していることから、(1)と(2)の「～っぱなし」が表す意味は異なっていると言える。

先行研究においては、「～っぱなし」の意味・用法について、「～っぱなし」の意味を分析することにより、用法分類がなされている。しかし、意味の解釈のしかたによって分類が異なるため、客観的な分析による分類が必要であると思われる。そこで、本稿では意味の分析のみではなく、「～っぱなし」の用例を集めた大量のデータを用いて、「～っぱなし」が用いられる文の構造(「～っぱなし」に前接する動詞や後続語等)の分析も行い、意味と文の構造の分析結果から「～っぱなし」の意味・用法について考察する。ちなみに、大量のデータを用いて「～っぱなし」の文の構造を探った先行研究は、管見の限りでは皆無である。

2. 先行研究

「～っぱなし」の意味・用法について言及しているものに森田(1980)、渡邊

(2)

(2000)、小西 (2001)、須賀 (2003)、藤城 (2006) がある。

森田 (1980 : 90) では、「～っぱなし」の意味について、『- ぱなし』は『放し』で、なすべき始末を怠って、そのままの状態にしてあること。初めの行為はいちおう最後まで完全になされたのであるが、その後始末を全くしない“……したまま放置する”状態をいう。」と記述している。渡邊 (2000) では、「動詞の過去形+ままだ」述語文と「動詞の連用形+っぱなしだ」述語文の意味的相違を明らかにする目的で、「動詞の連用形+っぱなしだ」述語文を動詞句の意味により、7つに分類している。小西 (2001) では、「～っぱなし」の意味について「(なんらかの事態のあと) そのままである、という状態を叙述する」とあり、有題「～っぱなしだ」文の用法分類について、動詞では分類不可能であるとして、「事象の型」(「上位事象」、「下位事象」) という概念により3つに分類している。須賀 (2003) では、用法分類に金田一 (1950) の「継続動詞」、「瞬間動詞」という視点が有効であるとして、2つに分類している。藤城 (2006) では、「～っぱなし」の基本義を「発話者がある事柄の『通常なされる操作や調整がない状態に放置される』という側面を捉えて提示していることを表す」と規定し、3つの用法に分類している。

このように、先行研究における「～っぱなし」の意味・用法についての言及はさまざまであるが、その代表的な用法は、「動作・出来事の継続」用法、「結果状態の継続」用法、「放置の状態」用法の3つであると考えられる。次に、それぞれの用法の例文を挙げる。

(3) 2時間歌いっぱなし [藤城 (2006 : 112)]¹⁾

(4) 昨日からこの部屋の電気はつきっぱなしだ。[小西 (2001 : 120)]

(5) マンガが読みっぱなしだ。[渡邊 (2000 : 16)]

(3)は「動作・出来事の継続」用法で、「2時間ずっと歌い続けている状態」を表し、(4)は「結果状態の継続」用法で、「電気がついた後、電気がついている状態が続いている状態」を表し、(5)は「放置の状態」用法で、「マンガを読んだ後、マンガを片付ける等の対処をせず、そのままの状態が続いている状態」を表すとされている。先行研究におけるこれらの分類は、意味の分析によるものであるため、解釈のしかたによって分類が異なることが考えられる。そこで本稿では、大量のデータを用いて、先に挙げた3つの用法と文の構造(「～っぱなし」に前接する動詞や後続語等)について調査を行い、「～っぱなし」の意味・用法について分析を試みる。

3. 「～っぱなし」文の構造

この章では、新聞データの用例を基に、「～っぱなし」が用いられている文の構造について調査を行い、先行研究における代表的な3つの用法と文の構造について考察する。

調査資料は、『朝日新聞記事データ集1996～2004年度版』の2003年（1月1日～12月31日）の1年分を使用する。用例の抽出方法は、上記の新聞データから「動詞の連用形+っぱなし」、「動詞の連用形+っ放し」を含む文、275例を抜き出し、漢字の表記の問題により、データ上では動詞が特定できない用例を調査対象から除外した。除外した用例は次の4例である。

- (6)看板などで押さえつけられて開きっ放しの防火扉。[朝日 (03.02)]
- (7)煙や炎の侵入を防ぐための防火扉には粘着テープが張られて開きっ放しになっていたうえ、階段には当時ロッカーや大量のゴミなどが放置されて唯一の避難路も十分に確保されていなかった。[朝日 (03.02)]
- (8)漁業者の一人がクラゲを追いつめるために、網は開きっぱなし。[朝日 (03.12)]
- (9)門を開きっぱなしにしているという。[朝日 (03.10)]

上記の方法で抽出した271例を用いて、まず、3つの用法と「～っぱなし」に前接する動詞について調査し、次に、3つの用法と「～っぱなし」の後続語等「～っぱなし」文の「文の型」について調査する。

3. 1. 「～っぱなし」に前接する動詞と用法

ここでは、先に挙げた新聞データを用いて「～っぱなし」に前接する動詞と各用法との関係について調査する。調査方法は、まず、271の用例を、先行研究の代表的な3つの用法「動作・出来事の継続」用法、「結果状態の継続」用法、「放置の状態」用法に分類し、次に、「～っぱなし」に前接する動詞を、工藤（1995）の動詞分類²⁾に基づいて、「主体動作動詞」（「走る」、「泣く」、「鳴る」等）、「二側面動詞」（「上がる」、「増える」、「沈む」等）、「主体変化動詞」（「立つ」、「座る」、「入る」等）、「主体動作・客体動き動詞」（「流す」、「鳴らす」、「こぐ」等）、「主体動作・客体接触動詞」（「食べる」、「踏む」、「訪問する」等）、「人の認識活動・言語活動・表現活動動詞」（「しゃべる」、「書く」、「探す」等）、「主体動作・客体変化動詞」（「出す」、「開ける」、「つける」等）、「再帰動詞」（「着る」、「脱ぐ」、「履く」等）の8つに分類した。調査の結果が

(4)

表1である。表中の「動作・出来事の継続／結果状態の継続」は、データの情報だけでは「動作・出来事の継続」用法と「結果状態の継続」用法のどちらに該当するか判断不可能だったものである。

表1 「～っぱなし」に前接する動詞と3つの用法

動詞の分類 \ 用法	動作・出来事の継続	動作・出来事の継続／結果状態の継続	結果状態の継続	放置の状態	合計
主体動作動詞	53	0	0	1	54
二側面動詞	0	5	3	0	8
主体変化動詞	0	0	43	0	43
主体動作・客体動き動詞	10	0	0	1	11
主体動作・客体接触動詞	4	0	0	1	5
人の認識活動・言語活動・表現活動動詞	6	0	0	40	46
主体動作・客体変化動詞	0	0	84	17	101
再帰動詞	0	0	2	1	3
合計	73	5	132	61	271

「動作・出来事の継続」用法は、「主体動作動詞」53例、「主体動作・客体動き動詞」10例、「主体動作・客体接触動詞」4例、「人の認識活動・言語活動・表現活動動詞」6例であった。(10)～(13)に用例の一部を挙げる。

「主体動作動詞」

(10) 1万メートルでもいっぱいいっぱいなのに、2時間も走りっぱなしなんて無理。[朝日 (03.08)]

「主体動作・客体動き動詞」

(11) そんなふうにして、一日ペダルをこぎっぱなしの少年時代をすごしてきた。[朝日 (03.05)]

「主体動作・客体接触動詞」

(12) チームはアクセルを踏みっ放しの状態ですべて相手を圧倒した。[朝日 (03.11)]

「人の認識活動・言語活動・表現活動動詞」

(13) カメラは回っていないのに、観客に向かってしゃべりっぱなし。[朝日

(03.11)]

「動作・出来事の継続」用法には、全て主体の動作を表す動詞が該当し、主体の変化を表す「主体変化動詞」が0例という結果は、「動作・出来事の継続」用法が「動作や出来事が継続している状態」を表すため、当然の結果であると言える。

「動作・出来事の継続」用法または「結果状態の継続」用法は、5例中5例全て「二側面動詞」であった。(14)に用例の一部を挙げる。

「二側面動詞」

(14)地価は下がりっぱなしで、温泉街を抱える地元からは「何も移転してこない」とぼやきも出ていた。[朝日 (03.09)]

(14)は、「地価がどんどん下がっている状態」と解釈した場合、「動作・出来事の継続」用法となり、「一度地価が下がった後、下がった状態が続いている状態」と解釈した場合、「結果状態の継続」用法となる。このような文に「二側面動詞」が該当したという結果から、「変化」の局面と「変化の結果」の局面の両方を表し得るという「二側面動詞」の性質により、「～っぱなし」が「変化」の局面を捉えると「動作・出来事の継続」用法になり、「変化の結果」の局面を捉えると「結果状態の継続」用法になると考えられる。

「結果状態の継続」用法は、「二側面動詞」3例、「主体変化動詞」43例、「主体動作・客体変化動詞」84例、「再帰動詞」2例であった。(15)～(18)に用例の一部を挙げる。

「二側面動詞」

(15)早く早くのオンパレードで、声のトーンは上がりっぱなし。[朝日 (03.01)]

「主体変化動詞」

(16)新監督は90分間、立ちっぱなしで指示を出した。[朝日 (03.09)]

「主体動作・客体変化動詞」

(17)ここ数日、一晩中テレビをつけっぱなしにしていた。[朝日 (03.04)]

「再帰動詞」

(18)お風呂に入るとき以外は腕にはめっぱなしである。[朝日 (03.07)]

(15)は、「二側面動詞」の性質により、「声のトーンがどんどん上がっている状態」と、「一度声のトーンが上がった後、トーンが下がらず、その状態が続いている状態」のどちらも表し得るが、文脈から「変化の結果の状態」が続いていると判断した。ほかの2例についても同様である。

「主体変化動詞」は43例であったが、主体の「変化」を表す動詞であるため、

(6)

「結果状態の継続」用法に該当したことは、当然の結果であると言える。

ここで特に注目したいのは、「主体動作・客体変化動詞」84例、「再帰動詞」2例である。これら2つの動詞は、「動作」と「変化」の両方を表すという性質をもっている。にもかかわらず、「動作や出来事が継続している状態」を表す「動作・出来事の継続」用法が0例であった。つまり(17)「ここ数日、一晩中テレビをつけっぱなしにしていた。」では、「～っぱなし」に前接している「(テレビを)つける」は、「テレビをつける」という主体の「動作」を表すとともに、「テレビがつく」という客体の「変化」を表す動詞であるが、「テレビをつけっぱなし」となると、「テレビを何度も何度も繰り返してつけている」という「動作」の継続ではなく、「(テレビをつけた後) テレビがずっとついている」という「変化」の結果の状態が継続していることを表しているのである。

「放置の状態」用法は、「人の認識活動・言語活動・表現活動動詞」40例、「主体動作・客体変化動詞」17例、「主体動作動詞」、「主体動作・客体動き動詞」、「主体動作・客体接触動詞」、「再帰動詞」がそれぞれ1例であった。(19)～(23)に用例の一部を挙げる。

「主体動作動詞」

(19)小山自身の言う「窯場荒らし」であるが、世話になりっ放しではない。塚本は定窯白磁と景德鎮の青白磁の技の復元でのちに人間国宝となった。

[朝日 (03.05)]

「主体動作・客体動き動詞」

(20)流しっぱなしだった番組が見返され、そして放送を文化と認め、知的財産として扱うための意識改革を制作者側にも迫るものだ。[朝日 (03.12)]

「主体動作・客体接触動詞」

(21)クラブは、市サッカー協会関係者を中心に今月発足したばかりだ。きっかけは、W杯後に残された、年間の維持管理費約1千万円のグラウンド。「市に頼ってばかりではいられない。使いっ放しでなく、自分たちで主体的に動かなければ」と女子高生からお年寄りまで約100人が集まった。[朝日 (03.05)]

「主体動作・客体変化動詞」

(22)村岡さんは手紙をもらいっぱなしとなり、返事は書けなくなりましたが、まさに、論語にある孔子の言葉「朋(とも)あり、遠方より来る亦(また)楽しからずや」の心境だったに違いありません。[朝日 (03.03)]

「人の認識活動・言語活動・表現活動動詞」

(23)経済界にとって望ましい政策を掲げても、言いっぱなしでは意味がない。

[朝日 (03.05)]

「放置の状態」用法は、「二側面動詞」と「主体変化動詞」を除く6種類の動詞が該当している。このことから、ほかの2つの用法とは異なり、「動作」や「変化」を問わず、あらゆる動詞が「～っぱなし」に前接し得ると考えられる。

以上の調査結果から、3つの用法は「～っぱなし」に前接する動詞に異なる傾向があることが観察できた。また、「動作・出来事の継続」用法の場合に、「主体動作動詞」など「動作」を表す動詞が前接することは当然の結果であったが、「結果状態の継続」用法の場合に、「変化」を表す「主体変化動詞」だけでなく、主体の「動作」を表す「主体動作・客体変化動詞」までもが前接するという結果は予想外であり、注目したい点である。これは「～っぱなし」が主体の動作ではなく、客体の変化を捉えたため、「結果状態の継続」用法になったと考えられる。そこで、「～っぱなし」には、「文のどこかにある『変化』に反応して用法が決まる」という性質があるのではないかと考えられる。

3. 2. 「～っぱなし」文の「文の型」と用法

ここでは、「～っぱなし」文の「文の型」と、各用法との関係について調査する。「文の型」とは、「母は働きっぱなしだった。」のような①「～ダ型」、「電話が鳴りっぱなしになり、対応に追われた。」のような②「～ニナル型」、「パソコンをつけっぱなしにして寝てしまった。」のような③「～ニスル型」、「意見の言いっぱなしはよくない。」のような④「名詞化型」の4つである。調査の方法は、3. 1. と同様のデータにより、先行研究の代表的な3つの用法「動作・出来事の継続」用法、「結果状態の継続」用法、「放置の状態」用法に分類し、次に、先に挙げた①～④の「文の型」に分類した。調査の結果が表2である。表中の「動作・出来事の継続／結果状態の継続」は、3. 1. と同様に、データの情報だけでは「動作・出来事の継続」用法と「結果状態の継続」用法のどちらに該当するか判断不可能だったものである。

表2 「文の型」と3つの用法

用法 文の型	動作・出来 事の継続	動作・出来 事の継続／ 結果状態の 継続	結果状態の 継続	放置の状態	合計
①～ダ型	62(85%)	5(100%)	74(56%)	52(85%)	193
②～ニナル型	5(7%)	0	11(8%)	3(5%)	19

(8)

③「～ニスル型」	6(8%)	0	27(21%)	2(3%)	35
④「名詞化型」	0	0	20(15%)	4(7%)	24
合計	73	5	132	61	271

「動作・出来事の継続」用法は、①「～ダ型」が85%で最も多く、②「～ニナル型」と③「～ニスル型」は7%と8%でだいたい同じくらいの割合で見られ、④「名詞化型」は0例であった。用例の一部を(24)～(26)に挙げる。

①「～ダ型」

(24)4歳の長女は昨夜、『お母さんは』と泣きっぱなしだった [朝日 (03.03)]

②「～ニナル型」

(25)見学申し込みは3カ月前からだが、受け付け開始直後には電話が鳴りっぱなしになり、2時間ほどで締め切ってしまうほどの人気だ。[朝日 (03.07)]

③「～ニスル型」

(26)その3人に5分間カメラを回しっ放しにして、いい表情を狙いました。 [朝日 (03.02)]

「動作・出来事の継続」用法または「結果状態の継続」用法は、5例全てが①であった。用例の一部を(27)に挙げる。

①「～ダ型」

(27)米価は下がりっぱなしだ。[朝日 (03.09)]

「結果状態の継続」用法は、「動作・出来事の継続」用法と同じく①が56%で最も多かったが、次いで③が21%、④が15%で、③と④の割合がほかの用法に比べて大きい。次に用例の一部を(28)～(31)に挙げる。

①「～ダ型」

(28)広さは約10平方メートルで、電気ヒーターがあり、電源は24時間入りっぱなしだったという。[朝日 (03.05)]

②「～ニナル型」

(29)これがないとスイッチが入りっぱなしになって細胞ががん化するとみられる。[朝日 (03.07)]

③「～ニスル型」

(30)明星セメントによると、火元とみられる休憩室の乾燥室では電気ヒーターを24時間つけっぱなしにしていた。[朝日 (03.05)]

④「名詞化型」

(31)扉の閉めっぱなしは、空気のとどみの条件を満たしていたわけだ。[朝日 (03.05)]

「放置の状態」用法は、①が85%で最も多く、②が5%、③が3%、④が7%と少数で、①が大多数を占めていることから、「動作・出来事の継続」用法と似ているが、④の「名詞化型」がある点で異なっている。次に用例の一部を(32)～(35)に挙げる。

①「～ダ型」

(32)吉田校長は「シラバスも生徒に与えっぱなしではなく、節目で確認しながら進めたい」と語る。[朝日 (03.05)]

②「～ニナル型」

(33)河出次官は「単に意見を聴きっぱなしになるのでは意味がない」[朝日 (03.10)]

③「～ニスル型」

(34)ただし、県の担当者は「植物を使うのは生態系としてのメリットはあるが、植えっぱなしにするわけにもいかず、管理が難しい面もある」と課題をあげる。[朝日 (03.09)]

④「名詞化型」

(35)2人は22日県庁で会見し、「会議は議論というより、意見の言いっぱなしに終始している」など問題点を指摘。[朝日 (03.01)]

以上の調査結果から、どの用法も①の割合が最も多いという点は同じであるが、「動作・出来事の継続」用法には④がなく、「結果状態の継続」用法はほかの用法に比べて③と④の割合が多く、「放置の状態」用法は、「動作・出来事の継続」用法と似ているが、④があることから、3つの用法における「文の型」は異なる傾向があると言える。

3. 3. 「～っぱなし」文の構造と用法のまとめ

3. 1. と3. 2. の結果から、「～っぱなし」に前接する動詞は、用法によって傾向が異なることがわかった。また、「動作・出来事の継続」用法は、全て「動作」を表す動詞が前接していたが、「動作」と「変化」の両方を表す「主体動作・客体変化動詞」や「再帰動詞」の場合、「動作・出来事の継続」用法にはならず、「結果状態の継続」用法か「放置の状態」用法になることから、「～っぱなし」は「動作」と「変化」の両方がある場合、「変化」を捉える性質があると考えられる。また、「文の型」についても、用法によって傾向が異なっていた。

以上のことから、「～っぱなし」に前接する動詞と「文の型」は、用法によって異なる傾向が見られたため、先行研究における代表的な3つの用法分類は、文の意味のみでなく、文の構造によっても支えられていると言える。

4. 「～っぱなし」の意味

この章では、「～っぱなし」の意味について、佐治（1980）の「中心的性質」と「共起的性質」という概念を用いて考察するとともに、アスペクト的視点と「社会通念」（世間一般で支持されている常識）という視点から、意味・用法についても考察する。

4. 1. 「～っぱなし」の「中心的性質」と「共起的性質」

「～っぱなし」の意味を記述するにあたり、本稿では佐治（1980）の「中心的性質」と「共起的性質」という概念を用いる。佐治（1980）は、助詞の「は」を例に挙げ、「中心的性質」という概念について『「は」のような、一定の語形と意味（対象的意味とか機能的意味とか）を持つ形式には、それがどこに現れていても常にもっている性質があるものと仮定し、それを『中心的性質』と呼ぶ。』と述べている。そして、「共起的性質」という概念について、「何と共起するかによって示す性質」であると述べている。

「～っぱなし」は、先行研究でさまざまな用法分類がされているように、その意味・用法は複雑である。3章の調査結果から、先行研究における代表的な3つの用法は、前接する動詞や「文の型」に、それぞれ異なる傾向があることが観察された。つまり、「～っぱなし」は、ある性質の動詞や「文の型」と共起することによって用法が分かると言える。このことは、佐治（1980）の「共起的性質」の概念により説明が可能であると言える。そこで本稿では、どのような用法においても「～っぱなし」がもっている性質を「～っぱなし」の「中心的性質」、ある条件が加わることにより「～っぱなし」が示す性質を「～っぱなし」の「共起的性質」として意味・用法を考察する。

4. 2. 「～っぱなし」の「中心的性質」

ここでは、「～っぱなし」の「中心的性質」を以下に示す。

「～っぱなし」の「中心的性質」：

ある状態変化が起こった後、当然期待される2度目の状態変化が起らず、

その状態が継続している様子を表す

上記の「中心的性質」が先に挙げた3つの用法の全てを満たし、妥当であることを、(36)~(38)で見ていくことにする。

「動作・出来事の継続」用法

(36) 2時間歌いっぱなし [藤城 (2006: 112)]

「歌っていない状態」から「歌う」という状態変化が起こった後、当然期待される「歌うことを止める」という2度目の状態変化が起こらず、「歌っている状態」が続いている様子を表している。

「結果状態の継続」用法

(37) 昨日からこの部屋の電気はつきっぱなしだ。 [小西 (2001: 120)]

「電気がついていない状態」から「電気がつく」という状態変化が起こった後、当然期待される「電気が消える」という2度目の状態変化が起こらず、「電気がついている状態」が続いている様子を表している。

「放置の状態」用法

(38) マンガが読みっぱなしだ。 [渡邊 (2000: 16)]

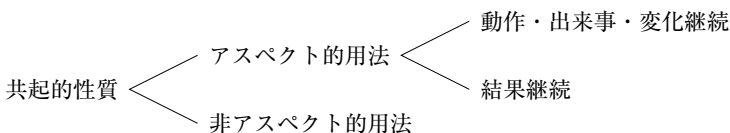
「マンガが読まれていない状態」から「読まれた状態になる」という状態変化が起こった後、当然期待される「マンガを片付ける」という2度目の変化が起こらず、「読まれた状態」が続いている様子を表している。

このように、先に挙げた「～っぱなし」の「中心的性質」は、3つの用法の全てに共通する性質であることが確認され、妥当であると考えられる。

4. 2. 「～っぱなし」の「共起的性質」

4. 1. でも述べたが、「～っぱなし」は、前接する動詞と「文の型」が共起条件となってある用法を示すということは、3章の調査結果によって確認された。このことから、先行研究における代表的な3つの用法の分類は、文の構造からも妥当性が示されたと言えるが、ここでは、アスペクトの視点と「社会通念」(世間一般に支持されている常識)という視点から、3つの用法を次の図1のように言い換え、「～っぱなし」の「共起的性質」とする。

図1 「～っぱなし」の「共起的性質」



「～っぱなし」の「共起的性質」は、アスペクトに関わる「アスペクト的用法」と、アスペクトには関わらない「非アスペクト的用法」とに分かれると考えられ、「アスペクト的用法」は動作や出来事や変化が継続している状態を表す「動作・出来事・変化継続」と、変化の結果が継続している状態を表す「結果継続」とに分かれると考えられる。先行研究における代表的な3つの用法のうち、「動作・出来事の継続」用法と「結果状態の継続」用法は「アスペクト的用法」の「動作・出来事・変化継続」に該当し、「放置の状態」用法は、「非アスペクト的用法」に該当する。

4. 2. 1. 「アスペクト的用法」

「～っぱなし」の「共起的性質」である「アスペクト的用法」を以下のように規定する。

「アスペクト的用法」:

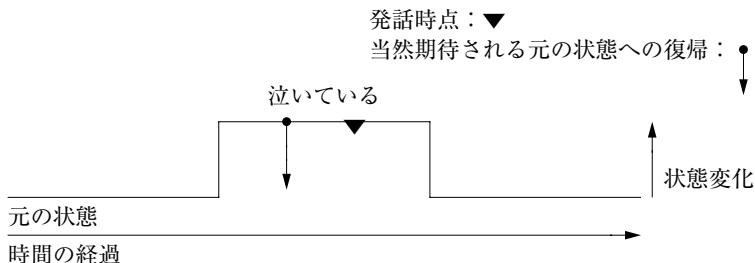
元の状態が変化して、それが継続している状態（「～ている」の状態）になった後、当然期待される元の状態への復帰（現在、継続している動作や結果の状態が終結して元の状態に戻る）が起こらず、その状態が継続している様子を表す

「アスペクト的用法」は、「～っぱなし」が捉える状態によって「動作・出来事・変化継続」と「結果継続」とに分かれる。次に、それぞれの用例を挙げ、その特徴について見ていく。

「動作・出来事・変化継続」

(39)実際に「甲子園出場」が実現した千葉大会優勝の瞬間は、あまりの感動に泣きっぱなしで「よく覚えていない」という。[朝日 (03.08)]

図2 「動作継続」

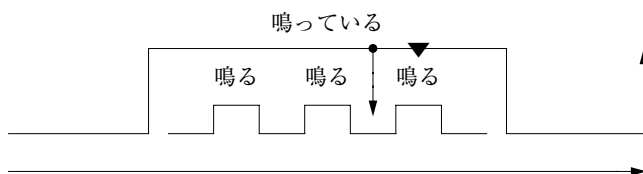


(39)の「泣きっぱなし」は、泣いていない状態から泣き出して、泣いている状態のときに、当然期待される元の状態への復帰（泣いている状態を止めて泣い

ていない状態に戻る）が起こらず、泣いている状態が続いている状態を表している。ここで注目したいのは、「～っぱなし」が「泣いている状態」（泣き続けている状態）を捉えている点である。

(40)HSV は一日中、問い合わせの電話が鳴りっぱなしだったという。[朝日 (03.04)]

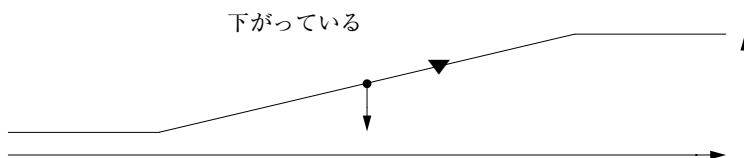
図3 「出来事継続」



(40)の「鳴りっぱなし」は、「電話が鳴る」という出来事が起こっていない状態から、「電話が鳴る」という出来事が頻繁に継続して起こっている状態（電話が鳴っては止み、鳴っては止み、という状態）のときに、当然期待される元の状態への復帰（「電話が鳴る」という出来事が続いている状態から、「電話が鳴る」という出来事が起こっていない状態に戻る）が起こらず、「電話が鳴る」という出来事が続いている状態を表している。ここで注目したいのは、「～っぱなし」が「電話が鳴っている状態」（鳴り続けている状態）を捉えている点である。

(41)米価は下がりっぱなしだ。[朝日 (03.09)]

図4 「変化継続」

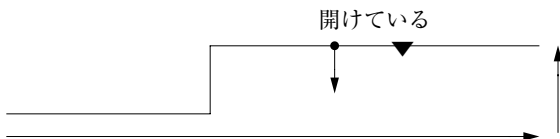


(41)の「下がりっぱなし」は、米価が下がっていない状態から、下がり始めて、徐々に下がっている状態のときに、当然期待される元の状態への復帰（徐々に下がっている状態から下がっていない状態に戻る）が起こらず、どんどん下がっている状態が続いている状態を表している。ここで注目したいのは、「～っぱなし」が「徐々に下がっている状態」（下がり続けている状態）を捉えている点である。

「結果継続」

(42)校長室のドアは開けっ放しになっていた。[朝日 (03.05)]

図5 「結果継続」



(42)の「開けっ放し」は、ドアを開けていない状態から、ドアを開けて、そのままドアを開けている状態のときに、当然期待される元の状態への復帰（ドアを開けている状態からドアを開けていない状態に戻る）が起こらず、ドアを開けている状態が続いている状態を表している。ここで注目したいのは、「～っぱなし」が「ドアを開けている状態」（開け続けている状態）を捉えている点である。

「アスペクト的用法」において「～っぱなし」は、「動作・出来事・変化継続」の場合、動作や出来事や変化が継続している状態を捉え、「結果継続」の場合、変化の結果の状態が継続している状態を捉えていることから、両方アスペクトに関わっていると言える。また、「中心的性質」にある「当然期待される2度目の状態変化」とは、(39)～(42)で見たように「現在続いている動作や出来事や変化が止まり、動作や出来事や変化が始まる前の状態に戻る」とであるという点からアスペクトと関わっていると言えるため、「動作・出来事・変化継続」と「結果継続」は「アスペクト的用法」であると言える。

4. 2. 2. 「非アスペクト的用法」

「～っぱなし」のもう一つの「共起的性質」である「非アスペクト的用法」を以下のように規定する。

「非アスペクト的用法」:

何かしらの「社会通念」（世間一般に支持されている常識）が存在しているという前提条件がある場合に、ある状態変化が起こり、その「社会通念」に沿った当然の状態変化が生じなかった状態の様子を表す

次に「非アスペクト的用法」の用例を挙げる。

(43)経済界にとって望ましい政策を掲げても、言いっぱなしでは意味がない。

[朝日 (03.05)]

(44)村岡さんは手紙をもらいっぱなしとなり、返事は書けなくなりましたが、まさに、論語にある孔子の言葉「朋（とも）あり、遠方より来る亦（また）楽しからずや」の心境だったに違いありません。[朝日 (03.03)]

(43)の「言いっぱなし」は、「今意見を言っている状態」ではなく、「意見を

言った後、何も対処がされていない状態」を「～っぱなし」が捉えている。つまり、「～っぱなし」が捉えている局面は、「言う」という動詞の本来の意味からは離れていると言える。このことから、(43)の「～っぱなし」はアスペクトとは関わりがないと考えられる。また、「非アスペクト的用法」では、「中心的性質」にある「当然期待される2度目の状態変化」とは、「社会通念」（世間一般に支持されている常識）により生じている「何らかの対処をすること」であり、「社会通念」が共起条件となって「非アスペクト的用法」の意味が生じると考えられる。先行研究における「放置の状態」用法は、この「非アスペクト的用法」に該当すると思われる。

5. まとめ

「～っぱなし」の意味・用法について、本稿では「～っぱなし」の「中心的性質」を「ある状態変化が起こった後、当然期待される2度目の状態変化が起こらず、その状態が継続している様子を表す」と規定した。この性質は全ての「～っぱなし」文に見られると考えたためである。そして、「～っぱなし」が「主体動作動詞」など「変化」を表さない動詞と共起した場合、「動作・出来事の継続」用法となり、「主体変化動詞」、「主体動作・客体変化動詞」など「変化」に関わる動詞と共起した場合、「結果状態の継続」用法となる。そして、動詞のアスペクト的性質とは関わりなく、「社会通念」の存在により生じるものが「放置の状態」用法である。アスペクトに関係する「アスペクト的用法」とアスペクトに関係しない「非アスペクト的用法」を「～っぱなし」の「共起的性質」とし、どちらの用法も先に述べた「中心的性質」を有していると思われる。

本稿は動詞の連用形に接続する「～っぱなし」文を研究対象としたが、今後はほかの「～っぱなし」文についても調査していきたい。

注

- 1) 下線は原文にはなく、本稿で加えた。ほかの例文、用例についても同様である。
- 2) 本稿では、基本的には工藤(1995)の「動詞の全体的分類」に従っているが、「主体動作動詞」に「内的情態動詞」（「いらいらする」、「おどろく」など）を入れている点、「主体動作動詞」と「二側面動詞」、「主体動作・客体動き動詞」、「主体動作・客体接触動詞」を別にしてしている点、「再帰動詞」と「主体変化動詞」

を別にしている点で、工藤（1995）の分類と一部異なっている。

《参考文献》

- 金田一春彦（1950）「国語動詞の一分類」『言語研究15』むぎ書房
- 工藤真由美（1995）『アスペクト・テンス体系とテキスト—現代日本語の時間の表現—』ひつじ書房
- 小西正人（2001）「現代日本語の「～ばなし」とアスペクトの意味—動詞の意味論への予備的考察として—」『京都大学言語学研究』20
- 佐治圭三（1980）「文法（理論・現代）」『国語学』121号
- 須賀章夫（2003）「金田一の動詞分類の再評価—「V-っぱなし」「V-ておく」の分析を通して—」『人文論究』第72号（北海道教育大学）
- 藤城浩子（2006）「-キリ、-ママ、-ッパナシーその基本義と提示方法—」『早稲田大学日本語教育研究』第8号
- 森田良行（1980）『基礎日本語2 - 意味と使い方』角川書店
- 渡邊ゆかり（2000）「「動詞の過去形+ままだ」述語文と「動詞の連用形+っぱなしだ」述語文の意味的相違」『広島女学院大学 日本文学』第10号

〈用例出典〉

『朝日新聞記事データ集1996～2004年度版』日外アソシエーツ

[付記]

第95回関東日本語談話会（於：学習院女子大学）における研究発表の折りに、多くの有益なコメントを頂戴いたしましたことを、記して感謝申し上げます。

（なかむら あい・平成19年度実践女子大学大学院博士前期課程修了・実践女子大学国際交流センター日本語集中プログラム日本語担当）